媚薬コットン・排尿・排便・オムツ・亀頭責め・お清め・四肢欠損・人体改造・赤ちゃん扱い・哺乳瓶・高い高い・尿舐め・強制連続絶頂等
※グロはありません。

人体改造博物館2――サンプル――

博物館で働くようになって二年。もうこの身体にも、仕事のペースにもだいぶ慣れてきた頃だった。
リビングの窓際に寝かせてもらって日向ぼっこをしていると、昼食の片付けを終えた諏訪が穏やかに切り出した。
「千尋、少し相談したいことがあるんだけど」
言いながら諏訪の手が優しくお腹を撫でてくれる。
「はい」
諏訪から相談なんて珍しい。一体何だろう。
「千尋、もう一度身体を弄らない？」
「え……」
「痛い思いをさせてしまうのは分かってる。けれどもう二年でしょう。そろそろ次のステップに進んでもいいかな、と思うんだけど」
「あ……」
それはどういう意味なのだろう。もうこの身体に飽きたということだろうか。それとも商品――展示品としての価値がなくなったということだろうか。
「……あの……」
でも、飽きられたくない。ずっと見ていてほしい。もし新しい展示品の方が可愛いなんて言われたら――。
「……千尋。もう二人で一生生活できるだけの金は貯まったよ。だから一度、休憩しないか、と思って」
「え？」
確かに展示品は二年働けば生活に困らないだけの収入を得られるとは聞いていたし、うちは二馬力だ。千尋の貯金には一切手を付けられていないので確かにもう十分だと言えるだろう。
でも突然。それに次のステップ、というのが気になる。
「ごめん、言い方が悪かったって言うか、順番が逆だった。お金もあるし、しばらく二人だけで過ごしたい。けれどこのままでは提出できる休職理由がないし、それなら――痛い思いはさせてしまうけれど、手術してまた新しい身体にして、そして復帰したら復帰後の仕事にも繋がるかな、と思って」
諏訪がどれほど愛してくれているのかは分かっているつもりだ。だから、きっと本音なのだろう。それに諏訪が休みたいというのなら拒否するつもりは一切ない。だって仕事でも家でも、ずっと世話をさせっぱなしなのだ。
「分かりました。僕もしばらく匠さんとゆっくりしたいです。でも……その、手術はどこを？」
「聞きたい？」

「あ……」
そうだ。この身体になったときも手術内容は一切知らないまま手術に挑んだ。プレゼントみたいだ、と思って。目が覚めたら諏訪の好みの身体になっている、というプレゼント。
「……いえ……今回も麻酔から覚めるのを楽しみにしています」
諏訪は嬉しそうに笑った。

※　※　※

「力を抜いてごらん」
「ん……」
千尋に手術について相談するとき、どうやら諏訪はすでに職場に打診していたようだった。ありがたいことに一番人気と言ってもらっているだけあって渋られたようだけれど、後で聞いてみたら実は半年も前から打診していたのだという。全く気付かなかった。でもそれだけ諏訪は休みたかったのだろう、と思うと申し訳なさが勝ってしまった。
でも休みは一年。諏訪には少し身体を休めてもらうことができるだろう。
「大丈夫、怖くないよ」
「はい……」
そして手術を終えて――なんと手術は尿道の移動だった。今までは亀頭のみの先端から普通に排尿していたのだけれど、その穴はそのままとっておいて、尿道の管を会陰に移動した。それだけ。
でも初めての排尿は怖かった。絶対痛いしそもそも感覚が分からない。でも諏訪はずっと抱きしめて尿が出るのを待っていてくれた。
「ゆっくりでいいんだよ」
「はい……ん……あ、出る……？」
出るような、出ないような。なんだかちょっとよく分からない。
「大丈夫……ゆっくりね」
後ろから抱きかかえられての排尿。でも四肢がない分身体は軽いので、諏訪は片手を股間――オムツに当てていた。
「うん、出せてる。温かい」
「やっ……」
尿の温度を確認されるなんて。
「こら、止めちゃダメだよ。ちゃんと最後まで出そうね。痛くない？」
「ん……でもなんかあんまり感覚がないような……」
「まだ術後すぐだからね、感覚が戻ってないんだよ……でもオムツだから関係ないね」
「はい……でもお漏らしなんて」
「恥ずかしくないよ。大丈夫。むしろこのままお漏らしを覚えてしまおうか」
「や……恥ずかしい」

「可愛いよ。お漏らししちゃう千尋、すごく可愛い」
「んっ……」
そんな甘い会話を病室でして、結局排尿の感覚を失ったまま、退院した。

それから半年。
「オムツを替えようね」
「え」
「おしっこ出てるよ」
「あ……」
全く気付かなかった。やはりまだ排尿の感覚が戻っていない。
「……どうしよう……」
「千尋？」
諏訪はこれが大変なことだと気付かないのだろうか。仕事ができなくなってしまうというのに。
「どうしたの？」
「……仕事……」
その一言だけで諏訪は何を心配しているか気付いてくれた。安心させるように抱きしめてくれる。
「仕事中、おしっこお漏らししてても大丈夫だよ」
「でも……」
あくまで展示品だ。お客さんの服を汚してしまわないようにとミルキングやカテーテルで抜いてもらっているというのに。
「仕事前はカテーテルでおしっこを抜いているでしょう。だから大丈夫」
「でも……」
それでも排尿の感覚がないと、いつ漏れてしまうか分からない。
「……大丈夫、それならずっとカテーテルを入れたままにしておこう」
「え……？」
「尿道の位置を動かしたときにお漏らしするようになってしまったって、普通に言えばいいんだよ。大丈夫。蓄尿パックに溜まったおしっこもお客さんに見てもらおう」
「ぁ……」
「黄色いおしっこ、どれくらい溜まったのかなってきっと戻ってきて見てくれる人もいると思うよ」
諏訪は何でもないことのように言うけれど、それって本当にすごく恥ずかしいことだと思う。
「匠さん……」
「ね、大丈夫。千尋のことは全て俺がするし、守るから。千尋は一緒にいてくれればそれでいいんだよ」
大好きだよ、と言ってもらってキスを受ける。好き。大好き。でも、一緒にいてくれればと言われても、そもそも千尋にはどこかに行くことができない。何もできない。自分で食べることも、飲むことも。そもそも起き上がることすらできないのだ。だからずっと一緒にいるということは、諏訪はずっと千尋の世話

をし続けなくてはいけないということだ。その負担は計り知れない。
「……千尋。まだ不安？」
「いえ……大変だよなって」
「大変？」
何が？　と諏訪は首を傾げた。
「その、僕の世話……」
「千尋！」
怒った声に、ビクリと身体を震わせる。
「千尋、ごめん。でもそんなこと言わない約束でしょう」
「でも……」
四肢がない身体は諏訪が世話してくれなければ何もできない。ただ寝たきり。もし諏訪が出て行ってしまえばただ一人で天井を眺めながら死を待つことしかできない。そんな身体。
「千尋。千尋の身体をこうしたのは誰？　俺でしょう」
「……でも、実際にしてみたら想像と違ったとかっていうのは……」
よくある話だ。だからきっと虐待はなくならない。
「千尋。俺は千尋を愛してるんだよ。だからこうして下の世話をさせてくれるだけでも嬉しい」
「……や……そんな、させてくれる、だなんて……」
「させてくれる、だよ。だって心を開いてなければこんな無防備に大事なところを曝してはくれないでしょう」
言いながら諏訪がオムツを開き、亀頭をツンと突いた。
「あっ！」
これは諏訪がたまにする悪戯だ。こうやって、千尋が感じてしまうのを楽しむ。
「可愛い。さあ新しいおしっこの穴を拭こうね」
「はい。綺麗に……して」
「……それはちょっと反則」
二年半のうち、喧嘩になったことは一度もない。大好きで大好きで、たくさん笑って生活している間に少しずつ冗談も言えるようになって。
二人で笑い合って、日差しの入るリビングで抱っこしてもらう。
「ゆらゆらして」
「うん。可愛い。赤ちゃんだね」
「や……」
ゆらゆら。それは身体を抱き上げて、左右にそっと振ってもらうやつだ。自分では動けないのでこうして揺らしてもらって景色が流れるのを楽しむ。それに軽く上に投げるようにしてもらうとふわっとしてまるでジェットコースターみたい。
「うわっ！」
「はは、油断したでしょう」

「びっくりした！」
ゆらゆらふわっ――そうやってまるで子供の高い高いのように遊んでもらう。
「ねぇ、匠さんって筋肉すごいですよね」
たくさん遊んでもらってからソファに下ろしてもらい、また抱っこ。やはり自分では座っていることができないから。
「そうかな？　元々多少は鍛えてたけど、今は自然についた筋肉かも」
見せて、と言うと抱っこの向きを変えてくれた。膝の上で向かい合う。
「太い」
「そうかな。でもこれがなかったらゆらゆらできないよ」
「やです。っていうか、太いって褒めたんです」
「そうなの？」
「はい。僕は細かったし」
「可愛かったけど……」
「へへ」
たまに、こうして自分の四肢が懐かしくなってしまうことがある。でもそんなときはとにかく笑う。だって今の生活があるのは四肢がないからなのだ。諏訪の好みになれたからこそこうして楽しく生活させてもらえている。
「痛みはどう？」
「大丈夫です。痛みに強くなったみたい」
時折襲う幻肢痛。最初こそ解決できない痛みに泣きわめいたりもしたけれど、諏訪は一度も邪険に扱うことはなかった。それにこうして身体を心配してくれる。
「そう……」
でもその表情は暗い。きっと自分のせいでと思っているに違いない。それは確かにそうだけれど、でもこんなとき、無理に気を遣う必要はないのだ。
「……だから、その」
「ん？」
「もう少し、乱暴にしてくれてもいいんですけど」
「乱暴？　千尋に？」
諏訪の綺麗な眉間に皺が寄った。
「や、その、普段じゃなくて。えっと……」
「あぁ、セックスのとき？」
「っ……」
もうこんなにずっと一緒にいる。なのにどうしてもそういう直接的な表現に慣れることができない。
「……まだ恥ずかしいの？」
「だって……」
セックス、と言うけれど、千尋は一切何もしていない。アナルの洗浄から片付けまで全て諏訪が一人で

してくれるのだ。だから千尋はただ快感に喘ぐだけ。器用な諏訪にされると洗浄まで気持ち良くて、結局訳の分からないままセックスまで終わっている、ということが多い。
「可愛い。本当に初心なままだね。身体はこんなにいやらしいのに」
「ぁっ……」
諏訪がオムツの前の部分を撫でる。その奥には敏感な亀頭。
「見たくなってきちゃった」
「ん……見て……」
もう気分はいやらしいモード。早く亀頭を愛されたくてたまらない。諏訪のために作った『亀頭のみ』を。
ベッドに移動し、真ん中に寝かされる。ソファでもいいのに、と思うけれど危ないからダメなんだそうだ。ベッドの上か床のカーペットの上にいるとき以外、少しだって離れたりしないくせに。
「あぁ……可愛い……」
亀頭を眺めるとき、諏訪はこうしてうっとりした声を出す。それが嬉しくて、ついいつでも見ていてほしくなってしまう。
「少し舐めたいな」
「ぁ……でもまだシャワー……」
「綺麗だよ」
「でも……」
確かにそこはもうただの突起でしかない。排尿は会陰からなので、うつ伏せ状態で排尿でもしない限り尿がつくことはないだろう。それでもやはり気になってしまう。
「大丈夫……ちょっと舐めさせて」
「ん……優しく舐めて」
「うん」
乱暴にしてもいいと言ったり優しくしてと言ってみたり。自分は随分我儘な性格になったなと思うけれど、諏訪が何でも許してくれるのでつい甘えてしまうのだ。
「あっ……ん……」
優しくして、と言ったので、性感を強引に高めるような愛撫はされない。ただ熱い口内で亀頭を温められ、それからゆっくりと形を舌でなぞられるだけ。
「ぁあん……」
ゆったりとした快感。気持ちいい。ずっとこのままふわふわしていたい。
「美味しい……可愛いよ」
「んっ……ぁん……ぁぁん……」
柔らかい刺激は心地いい。それに今、きっとこの様子だと諏訪は興奮していない。ただ亀頭をかまいたいだけなのだ。
「ん……ぁん……ぁぁ……ン……」
熱い息が漏れるけれど、やはり諏訪の行為は激しくはならない。ただねっとり舐められるだけ。まるで

味があるかのように。
「ん……あぁ……匠さん……」
「ん？」
こうして言葉はきちんと聞いてくれるところもずっと同じだ。
「もっと……」
「もっと？」
「激しくして……」
「優しいのがいいんでしょう？」
「や……もう……イきたい……」
「えっち」
「だって……」
「じゃあ亀頭だけね」
「ん……」
亀頭だけ――つまり入れないよ、ということだ。やはり諏訪は興奮していない。それでもいい。それにこんなときの諏訪は亀頭を長く愛してくれるから。
「あっ……だめ、イっちゃう……」
口に含んだ状態でくちゅくちゅと揉まれる。そうすると呆気ないほどすぐにイってしまうのだ。
「うん、イってごらん」
「んっ……あっ、ああっ……」
退院から半年は経っているけれど、射精の回数はまだそれほど多くはない。尿道が会陰に移されているので怖くてなかなか射精できなかったのだ。
「あっ……こわいっ！　怖いっ！」
射精の瞬間痛んだらどうしよう――その恐怖はなかなか消えない。
「大丈夫……ちゃんと出せるよ」
術後すぐは夢精だった。痛みで気持ちも萎えていたし、痛みが落ち着いてからも新しい尿道での射精が怖くてすることができなかった。
「あっ、あっ」
くちゅくちゅくちゅくちゅ――。
諏訪が舌で亀頭を弄ぶ。気持ちいい。イきそう。
「あっ……イく……イっちゃう……！」
恐怖心があるからか我を忘れるような激しい性感ではない。でも的確に高まっていく。
「あ、あっ……だめ……だめ……っア……！」
やはりゆったりした絶頂だった。けれどちゃんと射精ができた――ように思う。
「匠さん……」
「ん？」
諏訪はまだ亀頭を口に含んでいた。絶頂を褒めるように亀頭を包んでいる。

「出た？　僕、射精できましたか」
「ん」
亀頭の解放。そして会陰を覗き込まれる。
「うん、出せてるよ。でも勢いはないかな。だらだらお漏らししてる感じ」
「お漏らし……」
なんて恥ずかしい例え方だろう。精液のお漏らし。普通ならぴゅっぴゅと飛ばすものなのに。
「可愛いね。出せるのは出せたけど、飛ばせないなんて」
「やぁん……」
くちゅりと音を立て、諏訪の指が会陰を撫でた。
「ほら、分かる？　ぬるぬる」
「んっ……ぬるぬるやぁ……」
「どうして？　会陰なでなでされるの好きだったでしょう」
「やぁん……」
緩やかな絶頂だったとは言え射精したのだ。まだ頭も身体もぼうっとしている。
「ほら、可愛い。尿道口ができても会陰が気持ちいいのは変わらないね」
「やぁっ、なでなでしないで……」
また気持ち良くなってしまう。絶頂の余韻から冷めないまま次の快感に向かってしまう。
「じゃあトントンにしようか。トントンも好きだよね。ほら」
「あっ、あっ」
なでなでよりも強い刺激。イったばかりの亀頭がぷるんと揺れる感覚。
「可愛い。イったばかりで悪いけど、もう少し亀頭を舐めてもいいかな」
「ん……たくさん可愛がって」

〜〜〜〜

『うん……いい感じ。磨かれてるからピカピカで、つやつやだ』
『左様でございますか』
『うん。すごくいいよ。やっぱり終わりの時間が一番いい』
『お楽しみいただけて幸いです』
「あああああああああっ！」
諏訪が会話をしている。声は聞こえてくるけれど、気持ち良すぎて何を言っているのかが理解できない。
気持ちいい。とにかく気持ちいい。イってしまう。
『あぁ……気持ちいい。本当に触れているだけで気持ちいいよ。可愛い突起……愛おしくてたまらない』
『ありがとうございます』
「あああああああああっ！」
クルクルクルクル。手のひらを回され、亀頭が揺れる。

「ダメっ！　だめぇっ」
背が仰け反る。イく。イってしまう。
『あ、少し感触が変わった』
「ああっ……」
手が離れた。つらい。もうイきたい。これが諏訪の手ではないことは分かっているけれど、どうしてもイきたい。だってもうこんなに耐えた。諏訪の声を聞きながらこんなに、二時間半も亀頭だけの責めを耐えたのだからもういいだろう。楽になりたい。可哀想な亀頭を楽にしてあげてほしい。
『あ、やっぱりガーゼだけじゃなくて手のひらで愛情を込めて撫でる方がいいのかも。君も見て。ほら、さっきよりぷっくりしているでしょう』
『おっしゃる通りでございます。亀頭がいやらしく光り、淫乱さが増しております』
（やっ……）
淫乱。今、諏訪は千尋の亀頭を見て――お客さんに弄られて喜んでいる亀頭を見て淫乱と言った。
（ダメ……ダメっ……今は、今は触らないでっ……）
今触られたら確実にイってしまう。だからお願い――しかしその願いは叶わなかった。
『つまんだ感じはどうかな……』
「あああああああ！！！！」
ドクン、と亀頭の奥、下腹部の中が脈を打った。イってしまった。諏訪に見られながら、他の人の手にイかされてしまった。
『あぁ……すごい……興奮するよ。本当に可愛らしい亀頭だ』
「ひいいいぃあああああ！」
つまむのを止め、お客さんはまた手のひらで亀頭を転がした。イったばかりの亀頭を。
「ひあああああああああああ！」
目がチカチカする。気持ち良すぎて、ダメ。壊れる。壊れてしまう。
『柔らかい。それなのにちょっと奥に芯がある感じがいいね。あ、今日はもうガーゼ磨きは飽きてしまっているだろうから、歯ブラシを使いたいな』
『承知致しました。こちらをお使いください』
（歯ブラシ……）
もう意識が朦朧としている感じがした。なのに歯ブラシなんて。でも、お客さんも諏訪も千尋がイったなんて知らないのだ。だって見た目では分からない。勃起が見えないというのがこんなにもつらいなんて思わなかった。
『ありがとう。優しくするからね』
お客さんの声。逃げたい。でも逃げられない。イったばかりの亀頭を撫でられ、更に歯ブラシで磨かれてしまう。怖い。怖い。怖い。
「あ……あああああああああああ！　ひいいいいいいい！　あああああ！」

〜〜〜〜

「あ、亀頭のお掃除しようね」
「……え？」
「亀頭って言うか、尿道の」
「え……？」
意味が分からなくて、でも涙は急には止まらなくて。ぐすぐすしながら、止まったままの思考で必死に考える。
（尿道の掃除……？）
そんなことされたことがない。
「さっきしてなかったことに気付いたんだ。ごめんね」
「え、なに……？」
尿道の掃除。そんなこと聞いたことがない。
「あ、今おしっこしている方じゃないよ。千尋の亀頭には、膀胱には繋がっていないけど穴が残ったままでしょう。前の尿道の」
「あ……」
言われてみれば、確かに。残した亀頭には当然それまで尿道口として使っていた穴が残っている。
「穴の中、きっと汚れがたくさん詰まってると思うんだ。だから綺麗にしようね」
「ぁ……うん……」
だいぶ話が逸れてしまったけれど、確かにほとんど毎日亀頭にはローションが使われている。保湿クリームを塗ってもらうこともあるのだ。だから確かに穴には汚れが詰まっているだろう。
「ご飯できてるけど、ご飯の後にしようか」
「……や……今……」
食欲なんてない。
「……あの、匠さん、ご飯は？」
普段諏訪と一緒に食事をすることは少ない。千尋は諏訪に食べさせてもらうしかないのでどうしてもずれてしまうのだ。
「もう食べたよ」
「なら……」
早く、少しでも早く亀頭に触れてほしかった。

「痛かったら言ってね」
「はい……」
使っていない穴の掃除。でも亀頭にはしっかりと感覚がある。そこを掃除なんてされたら一体どうなってしまうのだろう。
「綿棒でくりくりするだけだよ」
「はい……」
怖い。痛いかもしれない。いや痛いだろう。怖い。

「じゃあ入れるね」
お湯でしっかりと濡れた綿棒。それが尿道口に掛けられたボディクリームを押し込むようにしながら入っていく。
「あっ！」
「痛い？」
「やっ……痛くは……」
亀頭をしっかりとつままれ、そして尿道をゆっくりと擦られる。
「あああっ、あっ、あああっ」
それは経験したことがない種類の快感だった。
「あぁ、気持ちいいんだね。尿道気持ちいいね」
「やあっ、ああっ！」
クリクリ。クルクル。出し入れされ、中で綿棒を回される。
「あああっ！」
すごい。すごく気持ちいい。痛みなんて全然感じない。
クリクリ。クルクル。
「あぁ、すごい。汚れがたくさん取れたよ。綿棒を替えるからちょっと待ってね」
「ぁ……や……」
恥ずかしい。汚れた綿棒を見せられないのは幸いだったけれど、でも諏訪に汚れを見られてしまっているというのは変わらない。
「入れるよ」
「んっ、あああっ！　ああっ！」
これは掃除なのに。ただの穴の掃除なのに、すごく気持ちいい。
「可愛い。使ってない穴クリクリされて気持ち良くなってる」
「ああっ！　ダメっ、ああああっ！」
亀頭を掴む指がすり、と表面を撫でた。

〜〜〜〜

つままれる度にじゅわ、とコットンから媚薬が流れ出す。それが陰嚢を伝い、落ちていく。
「ああああっ！」
気持ちいい。でももうイきたい。ずっとイきたいと思い続けているのにまだイかせてもらえない。
「敏感な亀頭だね」
「あっ？　なにっ、あっ」
どうしたのだろう。話が全く分からない。
「この亀頭、昨日お客さんに弄られてイっちゃったね」
「あっ！」

気付いていたなんて。
「ん？　気付いてないとでも思ってた？　この亀頭は俺のだよ。大切な、俺の千尋の亀頭のことを俺が分からないとでも思った？」
「あっ、ああっ」
怒っている――のだろう。でも口調は変わらず優しいまま。
「まぁ、お客さんは千尋が何度も何度もイっちゃったのに気付かなかったけれど……つらかったね。亀頭しかない上にミルキングで射精もできなくて、何度も何度も気付かれないままイったばかりの亀頭を擦られ続けて……」
「ああああっ！」
一気に昨日の快感と強すぎる刺激による苦痛が脳内に甦る。
「見てみようか。どんな亀頭だったのかな、俺以外の手に触れられて悦んじゃう亀頭」
「ああっ」
ペリッと思い切りガーゼが剥がされた。剥き出しになる亀頭。媚薬に濡れた亀頭が空気に触れてびくりと震える。
「あぁ……すごくいやらしい亀頭だね。ぷっくり膨らんで、真っ赤になって。これならお客さんの指でイっちゃっても納得だ」
「やっ、ごめっ、あっ」
ふーと息が吹きかけられる。それだけで気持ち良くてびくびくと身体が跳ねる。
「ねぇ、どんな気分だった？　イったばかりの亀頭を、イったことも気付かれないまま弄られ続けるの。家でもしてみようか。仕事みたいにミルキングして、ずーっと弄り続けてみようか。何時間も何時間もずーっと。俺は決して飽きないから、仕事みたいに途中休憩が挟まれることもないよ。一人でずーっと、もしかしたら千尋が失神しても止めずに弄り続けるかもしれない」
「あああああっ！」
想像だけで亀頭が揺れる。してほしい。何時間でも亀頭を愛してほしい。
「してっ、してええっ！」
「してほしいの？　亀頭、イっても弄るのやめてあげないよ。苦しくてもつらくても気持ち良くても、ずーっと可愛がり続ける。真っ赤になっても、痛んでも」
「ああっ、いいっ、匠っ、さっ、ならっ」
亀頭のすぐ近くで話されるだけなのに――でも吐息だってかかるし、亀頭には視線だって感じている。それに言葉。たったそれだけの刺激でも勝手に嬌声が漏れてしまう。
「そう。じゃあしてみよう。お客さんとどんな風に違うか、考えながら耐えるんだよ」
「ああああああああああっ！」
待ち望んだ刺激。諏訪の指が亀頭に触れた。そしてゆっくりと亀頭を指先一本で撫でられる。
「ここ、どんなだった？　そんなにあのお客さんは上手だったのかな」
「ああああっ！　イくううっ！　イくううう！」
「ダメだよ。他の男のことを思い出しながらなんてイかせない」

「ちがっ、やあああ！」
指が離れ、今度は息だった。ふーと細められた吐息が亀頭にぶつかる。
「ほら、答えて。あのお客さんは上手だった？」
「ちがっ、ちがうっ」
確かに他のお客さんとは触り方が違った。けれどあんなにイってしまったのは単にイヤホンで諏訪の声を聞きながらだったからだ。諏訪が千尋の大事なところを他のお客さんに触るように勧めていたから。大事なところを責めるための道具を諏訪自身がお客さんに渡していたから。
「でもイってたよ。何度もイってた。イったばかりで敏感なときでさえ刺激を悦んでた」
「ああああああっ！」
また指先が触れた。そしてクルクルと亀頭を撫でる。
「あっ、ああっ！」
もうイきたい。苦しい。イきたいしか考えられない。
「イくっ、イきたいっ」
「ダメ。この亀頭は俺以外でもイっちゃう亀頭だから。ローションがよかった？　それともストッキング？　あぁ、歯ブラシかな。あれは初めてだったね。どうだった？」
「あああっ！」
思い出させないでほしい。刺激としても本当に気持ち良かったのだ。あれが諏訪の手によるものだったらもっとよかったのに。亀頭のブラシ掃除。物のように扱われる亀頭。
「千尋。今日はちょっと悪い子かな。お返事が上手じゃないね」
「やあっ！　ごめんなさいっ……！」
ちゃんといいこになるから悪い子なんて言わないでほしい。嫌われたくない。ずっと好きでいてほしい。
「千尋、どれがよかった？　あぁ、ガーゼもあったね。指で触れるだけもあった。どれが好きなの？　この亀頭は何をされると一番悦んじゃうのかな」
「ああああっ！　ロっ、おロっ！」
「ロ？　お客さんはロでするのは禁止だよ」
「だからぁっ！　匠さんっ！　匠さんのおロっ！」
一番好きな刺激は何かと言われれば、それは確実に匠のロだ。フェラチオ――とはもう言えないかもしれないが、亀頭を口内でくちゅくちゅされるのが一番好きだ。されるともっとその刺激を感じていたくてイくのを必死に耐えてしまうほど。
「……本当に？」
「ほんとっ！　ああああっ！」
くるくると亀頭を撫でる指は止まらない。止めてほしい。いや止めないでほしい。でもイかせてほしい。これだけじゃイけない。イきたい。手があったら自分で触れるのに。足があったら自分で腰を振ってシーツや机の角に亀頭を擦りつけるのに。壁紙だっていい。何でもいいから、腰を振るのに。
「やあああああ！」
もう苦しくて涙が止まらない。つらい。イきたい。こんなにつらいのは仕事でもなかなかない気がする。

とにかくおかしくなりそう。気が狂ってしまう。
「……赤ちゃんなのに」
「えっ……」
止まった刺激。無意識のうちに閉じていた目を開けるとすぐ近くから諏訪に覗き込まれていた。
「千尋は赤ちゃんなのにね」
「あ……たく……？」
何を言っているのだろう。あぁでも昨日も子供みたい、赤ちゃんみたいと言われた覚えがある。
「千尋は自分では何もできない可愛い赤ちゃんなのに、亀頭をくるくるされて気持ち良くて泣いちゃうんだね」
「あ……あ……」
なんとなく――諏訪の思っていることが分かった気がした。
「……匠さん……ちーの……亀頭……イかせて……」

約４万９千文字です。
宜しくお願い致します。